

一九七六年五月獄中獄外統一行動を聞いてぬくぞ!!

私は奴を思い切り蹴とばし手をふりほどいて立ち上った

東アジア反日武装戦線獄中兵士 荒井 まり子

四月十九日

「おまえはここに楽しみに来てんだろう」と黒ブチメガネの南三舎の区長が言った。奴は、目かくしフェンスの穴が数倍に拡がっているのを見つけて、ハタキを強奪して行つた。しかし、すでに私のいる房には、そよ風が吹き込んでくるし、外のテニスコートや散つてしまった桜の木、れんぎょうのあざやかな黄色が、手にとるように見えるのだ。「まったく子供と同じだ。おまえにゃ、棒っ切れを持たせてはおけん!」こんな穴倉のような所に閉じ込められて、目隠しをされたら、目の前のフェンスをブツ壊したくなるのは、人間としてきわめて当然のことではないか。奴らの言いなりにならずに、人間として生きようとするのが八子供Vと同じなら、私は永遠に八子供Vでありたい。しばらくすると、こんどは南三舎の係長がどなりこんでくる。「おまえ、朝、二階の奴にオハヨウとかアイサツしただらう。これからそんなことしたら承知せんぞ。」私は、「挨拶して何が悪い。『仲間同士は仲良くしましょう』と収容者の心得にも書いてあるではないか。朝起きたら、『オハヨウ』と言う

のは私の習慣だ。やめるわけにはいかない。」奴「やらせないよ!」私「何と言われようとアイサツはやりますよ!」奴「やらせないよ!」指示に従わないと処置するぞ!私「処置とは何だ? カッテにやってくれ。あんたは、我々を何だと思ってるのだ。我々は人間だ。オハヨウの一言が何故悪い。あんただって、『オハヨウ』ぐらい言うのではないか?」奴「ジャバ人とは違うんだよ。ジャバ人にはあたりまえのことでも、ここに収容された以上、この規則に従え!」いいかげんウンザリです。奴は頭に血がのぼって、今にもとびかかってきそうな剣幕だったので、私は、あとは無視して、本を読んでいた。ずいぶん長いことそのまま私を睨みつけていたが、つきそいの女看守にブツブツと何か言って退散した。奴らには、我々が少しでも人間らしいことをするのが、ものすごくお気に召さないらしい。何であんなに目くじら立てなきゃならないのか。

お昼休みに窓の外で人声がするので、フェンスの破れ目から外を見ると、チョーエキのおじさん達が楽しそうにテニスをやっている。私は嬉しくなって見物していた。チョーエキのおじさん達は十二ノ

三人。アマリの人達はベンチに腰かけて楽しそうにおしゃべりしている。ところが何と言うことだ。チョーエキのおじさん達のテニスは十分間で終ってしまい、その後四人の緑服のファシストがテニスコートを占領してしまったではないか。その後奴らは五十分もたった四人でテニスにうち興じていたのです。時間がわかるのは塔の上の時計がここからは見えるからです。(ただでは見えない。鉄格子につかまって、窓のところに上がると見えるのです。時間がよくわかってとても便利。チョーエキのおじさんたちは、起床六時三十分仕事は午前八時から午後四時までです。)獄内の少し人間的な施設は、全て獄中者のためにあるのではなくて、ファシストどものためにあるのです。「オレ様たちが食後の休憩をしている間たった十分間だけ、オレ様のコートをおまえらに貸してやろう。ありがたく思え。」どうだい、オレ様はなさけ深いだろうと言わんばかりです。

女区の風呂まで入浴に行ったら、階段のところでゆきちゃんとバツタリ。「ヨウッッ」。「今、南三舎よ」。「ガンバレ」手を握ろうとすると看守が妨害。風呂にはいつている人がいたので、しばらく待たされる。五分位して、先の人が出たので、風呂に入ろうとすると、またまたゆきちゃんとバツタリ。「まりちゃんガンバレ」。「オウッッ」奴らのドジなのだ。その後、「五房(あやちゃん)お願いします」と言ってるのに、五房はなかなか出てこない。私はできるだけノラリクラーと服を脱ぎながら廊下をのぞいていたのだが、奴らは、私があやちゃんに声をかけるのをおそれて四人位でドアの前にたちふさがり、目かくしをする。私が、湯ブネ

に入るのを見届けてから、五房を出したのだろうか。あやちゃんに会えなかった。でも風呂から出て「デタラメチョーバツハンターイ」と叫ぶと、あやちゃんがバチバチと手を叩いたのが聞こえました。あやちゃんはチョーバツ中でハンストの最中でした。

夕方、姿は見えなかったけど蛙のなき声を聞きました。ビックリしました。眠りから醒めたのですね。もうそんな季節でしょうか。ここの房はただけっこう寒いのです。窓のすぐ下で一匹の蛙がクロクロとんでいるのです。昼間は、デーデーポッポの山鳩の声も聞こえました。胸が高なるのをおぼえました。ハトポッポは、二階や三階の仲間のところは遊びに行くようですが、一階に仲間が住んでるということを発見してくれません。そのうちにきつとハトポッポと友達になります。女区のハトポッポとは友達だったのです。こないと淋しい。

自殺房にブチ込まれている仲間達。ネコともハトとも戯れることができない怒りを共有すべく、私はハトと戯れています。開かない窓、鉄板のはまった窓、外の空気や太陽の光と直接にふれることのできない房にブチ込まれることと、キラキラと七色に光る羽のハトがすぐ目の前でゴハンツプをついばむ姿をじっと見ることでできる房との何という違い!

絶対に自殺房をブツ壊さねばならない。単に暗いとか湿っぽい、ほこりっぽい健康破壊房だなどと、言葉では表わすことのできない人間性抹殺房なのだ。日常のありとあらゆる瞬間において殺されているのだ。二四時間監禁の独房というだけで人間性を破壊されているのに、その上、外気まで奪うなんてことは人間Vのやれること

ではありません。鳩ボッポが遊びに来る度にこの喜びを奪っている敵に対する怒りに煮えくりかえるのです。

四月二十日

女区主任より、「一七日にここに連れて来られる際に大声を出したことで取調べになつてゐる」との告知。「何が取調べだ。そっちがデタラメやつていて暴力をふるつてゐる」といふ。奴「あなたには言つてゐるはずだ。もっと素直になれ。すぐにどうせいこうせいと言つたつて規則でどうすることもできないことがあるのだ。もっと利口になれ。自分が損するだけだ。大声なんか出さないでおとなしく公判の準備でもしてればよいのだ。もっと人間らしくならないさ！」

「公判の準備をしようとしていたら妨害されたので抗議してゐたら、ここに連れてこられたのに？ 人間らしくするために奴の指示には従えんのに！」

「それが、あなたの言える言葉か！」と、どなりつけると退散してしまつた。奴らから見ると、フェンスをこわしたり、房内で動きまわったり、逆だちしたり、ボクシングのマネをしたり、歌をうたつたり、オハヨーと言つたり、ドアを叩いたりする我々は、野獣に見えるらしい。そうだ、我々は奴らに対しては牙をむきだした狼だ。

南三舎のオニがまたもやご来房。「おまえ、点検の時に正座しないそうだが点検の時は正座してうけるもんだ。これからはオレが点検にくるからな。正座しなかつたらひどいめにあうぞ。わかつたか」「なぜ正座の必要があるのか説明して下さい」「説明の必要はねえんだよ。おまえは言つてわかるような奴じゃない」「あなた方

と私が対等な人間ならば、あなたが立っているのに私が奴隷的に正座する必要は全くない。あなたが我々を支配しているのだという管理者支配者意識を満足させるためにだけ我々に屈辱的な姿勢を強要しているのではないか」「つべこべいうな。今までずっと正座しなかつたそうだが、オレはどんなことがあつても正座させるぞ」「暴力を使うということか」「ああ、暴力だつて何だつてだ！」「あなたがたのやり方は最後は結局暴力でおさえつけようというのじゃないか。暴力支配には断乎抗議する！」

「そうだ。暴力だ。どんなことをやつてもオレはおまえに坐つて番号を言わせるぞ。体を張つてな。命をかけても坐らせる。オレのところでもそんなことを絶対に許さない。他の奴はどうか知らんが、オレは絶対許さんぞ。いいか。警告しておく。あとで後悔するなよ！」

「あなたがそうまで云うのなら、私は体を張つて命をかけても奴隷の屈辱は拒否します！」

「何ともはや……奴には「暴力ではないか」の抗議は抗議にならないのだ。自らが「暴力を使って支配するのだ」と公言してはばからないのだから。ウルトラファシストそのものである。しかし、奴は、決して特別の看守ではないのです。今までだつて奴は一貫して獄中人民をこうして支配してきたのであり、教えきれないほどの仲間たちが、奴のようなファシストに殺されてきたのでしょ。今夜の点検が楽しみです。命をかけても坐らせる者と命をかけても坐らない者との対決です。しかし、奴の敗北は目に見えています。奴がどれほど頑張つたつて私を奴の言うなりにさせることは絶対不可能なのですから。南舎の仲間たちはこのオッソロシイオニに一挙手一投足まで支配されているのです。二階の優しいおにいちちゃん達も、「オハヨー」「オヤスマー」に答えてくれなくなり

ました。きつと脅迫されたのでしょう。〔午後二時記〕

午後四時。楽しみの点検。待ちに待ちたる点検です。ドアが開いた時、私は食器を洗っていました。仕事を続けながら、例の調子で「デタラメチョーバツ反対」暴力支配に断乎抗議する。しかし奴は最後まで言わず、ドカドカと上がりこんできて私の髪をひつつかんだと思うと、私を床の上につき倒した。「いいか、オレが教えてやるよ。点検というのはこうするもんだ。」髪を毛をつかんでグルグル引きまわし背中から乗っかってきて、私を坐らせようとする。私が足を伸ばしたままでいると足を蹴って足をおりまげようとする。そして、腕を背中でギリギリとねじあげ、髪を毛をつかんだまま、「番号言え、番号。」

「笑わせるんじゃない。こんな暴力で強制されて、番号が言えるか。暴力をやめろ。」私は奴を思い切り蹴とばし手をふりほどいて立ち上がった。

「コノヤロー。」立ち上がると同時に再度、床につき倒され、ひざでグイグイ押しつけられる。腕をねじり上げ身動きのできないような姿勢を強いた上で、「番号を言え。」

「死んだって言うものか。」立っては投げとばされ立ち上がった。髪を毛をひっぱられ、けとばされ……これを教え切れないほどくり返す。「暴力をやめろ。」の抗議に対して、そばで見えたアヒルのような看守部長が、「どっちが暴力だ。おまえの方がよっぽど暴力ふるってるじゃないか。」とチョッカイを出す。私が奴の手や足をふりほどこうとがいて、奴を蹴りあげたり叩いたりしているのに対してだ。大きな男がおそいかかってくるのに対する

正当防衛ではないか。奴は「ああ、暴力だって何だっていい。オレにかみつくんならかみつけ。」奴にとっては暴力はごく当り前のことなのです。キドリヤ看守が「もういいかげんに言いなさいよ。ちょっと言えはいんじやないの。」奴の手をふりほどいて「私は、あんたがたの奴隷ではない。屈辱的点検の強要には、どんなことがあっても従うつもりはない。さあ、とっとと出て行け。」私はあんとレスリングなんかやりたくないんだ」と奴を房外へ押し出そうとすると、奴は「誰がレスリングやとるか。オレはおまえに点検のやり方を教えてやってるんだよ。」「冗談言うな。それが人間に対して教えるという態度か。あんたのやり方は、牛や馬を調教する時のやり方で、人間に対するやり方ではない。私は、牛や馬ではない。暴力で強制されることには従えん。教えるというのなら、なぜ正座して点検を受けねばならないか説明しろ。」奴「おまえは言葉で言っただけのような奴じゃないんだよ。規則だ。規則には従え。」

「出て行け。」と、奴を蹴とばすと、「番号を言うまでは絶対に出て行かんぞ」とまた床に倒し押さえつける。床に倒されたまま、ふと水道の方を見ると、水が出しっぱなしで今にも床に溢れそうになっている。奴をふりほどいて水を止めに行こうと立ちあがるとまたもや蹴りあげられ、ドタッ。「水道の水ぐらい止めさせろ。あふれそうじゃあないか。」と抗議すると、「よし、止めろ。」奴は汗だくになってポケットからハンカチを出して額の汗をふいている。水を止め終ると、またたくまに床につき倒され、再度、「番号を言え。」「言わない。」のくり返し。しばらくすると、目の前にもう一人の馬ヅラ看守が現われる。私と奴の格闘をしばらく見物した後、

上がり込んできて、奴に加勢。

「暴力はやめろ。獄中者にこのような暴力をふるうことがあんなにたがたには許されているのか、これが合法的な処置か、説明しろ。獄中者には、基本的人権はないのか」と抗議すると、「何が基本的人権だよ、おまえのような奴には人権もクソもないんだよ。人の基本的人権を考えないようなことをやってきてぶちこまれたくせに、何が人間だ。甘くしてりゃあいい気になりやがって、ここじゃそうはいかないぞ。いいか。オレがわからせてやるよ」と怒鳴るやいなや、首の後ろをギリギリと締めつけて、顔をタタミにドンドンとぶつける。腕を両手でギリギリと逆方向にねじりあげたかと思うと私の上に足であがってきて、エビ責めにし、顔を足でふみつけた。その足の臭かったことといったら。骨が折れるのではないかと思うほどの痛さに、大きな声も出せず、「ハハハ……あんたがたの正体はわかったよ」とやつのことと言うと、馬ヅラは「オマエの正体だつてわかったぞ」。アヒル看守部長が見るに、見かねてか、「もういいですよ。この人はものすごい強情なんだから、何をやってたつて無駄ですよ。殺されたつて言わないでいてるんですから。いくらやってもダメですよ」。女区の看守は、常日頃から鍛えられているから、このような墓穴掘りは無意味とワカッテいるのです。看守部長の声に奴はやつと手を離れた。私はしばらくの間、起きあがれずにいた。床に倒れたまま呼吸を整えていると、南三舎係長が「外に出る。暴力はやめる、だから番号を言え。オレが外に出れば番号を言うか」と言ってくる。「今頃になって暴力をやめるとは何だ。さんざん暴力をふるつて。謝れ。あんたが謝つたら番号を言つてやる。」奴「番号を言え。」私「なぜ、それほどまで

して言わせたいのだ。正座強要・奴隷的点検の強要がなぜそんなに大切なんだ。そんなものは明治の封建時代の遺制だ。私とあんたは対等の人間のはずだ」奴「明治だって封建制だっていい。これがオレの仕事だ。おまえがオレの暴力を訴えるのなら訴えろ。うけて立つてやる」密室での蛮行が日帝の法廷ではどのように処理されるのかを奴は知っているからこそこういうことが言えるのでしょう。

看守部長が、「明治から法律は同じだ。憲法だって同じだ」と叫びました。サスガです。因を頂いた天皇制ファシズムの法律が、監獄では堂々とまかり通っていること、明治憲法も日本国憲法も本質は同じだということを奴らはよく知っています。ヒロヒトクンも言つてたもののね。戦前の私も戦後の私もどこも変わりはありません」と。しばらくして馬ヅラがいなくなったと思うと南舎の区長（黒メガネ、四月一七日に格闘した相手）がやってきて、「こいつは全く聞きわけのないガキと同じだ。番号を言え。番号を言えばそれですむことじゃないか。ガキのようなことはやめろ」なおも抗議する私に、係長はやつとあきらめたらしく、房の外に出た。区長「こいつは正気の沙汰じゃないよ。まともに相手にできる奴じゃあない」係長は「また明日の朝もくるからな。明日はキチンと言えよ」と言いつつ去って行った。「人間じゃないよ、アレは」との声がある。奴らに最後まで従わない人間は「キチガイ」にされ「人間じゃない」とされるのだ。奴らが去った後の房内は衣類カゴの中の衣類が飛び散り、むしりとられた髪の毛だらけ。馬ヅラの、ムツとする足の臭いが顔や体中にこびりついて吐き気をもよおす。気がつくとも左手の指の間から血が出ており、血が壁にも飛び散っていた。しめつけられた首の後とねじりあげられた腕、背中が痛い。

しかし、日頃の柔軟体操が効あって、「エビ責め」も、逆ねじりも、奴らが思ったほど効果はなかったようだ。ゆきちゃんの手紙でおよその見当はついていたので、心の準備ができていたものの、このくやしき、この怒りを表現する言葉を今持ち得ません。「爆弾魔には人権などない。爆弾魔は看守に殺されたって当り前だ」。奴らの論理はこの一言につきます。獄中者は「人間」では決してない、奴らの思いどおりにいかない人間は、痛めつけ、殺すまでだ。デカバンの戦い、デカバンの怒りそしてデカバンの勝利に心から拍手を送ります。奴らに教えてやらねばなりません。暴力で支配しようとしても、それは絶対敗北につながるだけだということを。屈服するぐらいなら死を選らぶ人間がいるのだということを。奴らにとっては、このようなことは日常茶飯事なのでしょう。明日もまた……です。これから毎日二回、奴らとの格闘が日課になるのでしょうか？あまりにもムチャクチャで何と言ったらいいいのかわかりません。

内出血箇所 右上腕四ヶ所、左上腕四ヶ所、左前腕四ヶ所、右足一ヶ所、左足二ヶ所。ひっかき傷② 右手指一ヶ所（少量出血）。四月一四日の内出血もあるので（右足六ヶ所、左足三ヶ所、右手首二ヶ所、左手首二ヶ所）、体中アザだらけです。この分で見たらしまいには丸っぱげになってしまわうでしょう。柔軟体操はリンチに対して強力な武器になります。とくにアーチはエビ責めを粉碎する。いっぱい、体を鍛えよう。南舎における主格正常化の闘いをおし抜けよう。

へいったん牢獄のドアが背後でガチャンと締まったら、それから先には法律はない『もし奴らが朝にきたら』Vのです。

四月二一日

朝八時頃南舎係長が来て、「どうだ、荒井。坐って点検うけないか」。「きのうの暴力行為について謝罪して下さい」と要求。すると奴は「悪かった。きのうのことはオレが全部悪かったあやまる。どこかに訴えるなら訴えてもかまわん。それで有罪になれば刑ム所でも何でも入る」とひたすら低姿勢。「オレはただおまえを坐らせようとしただけで、暴力をふるうつもりはなかった。おれのやり方はまずかった。ああいうことであんたにわからせようとしたのは間違っていた。あんたの意志の強いには驚いたよ。どこか痛いところはないか」。奴は、自らの行為の違法性を知っているのです。そしてあれが男の懲役囚を扱ういつものやり方なのです。奴はあのようにすれば私が奴の言いなりになると本気で思っていたのです。「女の扱い方をオレは知らんから」「ああそうだよ、男の奴はひっぱってきてわからせるようにしている。今までだってそうやってきた」。奴は今まで暴力で獄中者をおさえつけてきたのだから今回も同じようにして「わからせよう」としただけというわけです。馬ヅラ（私を逆エビ責めにした奴）の名前と役職名を教え、奴にも謝罪させよ、奴の暴言（「人権などない」「人間ではない」等）を撤回させろ、と要求すると、「オレが代わって謝る。オレがやめさせなかったのが悪いんだから、オレの責任だ」「名前、役職名は言えないが、それは伝えておく。しかし、彼が謝りにくるかどうかはわからんよ」「同じ人間に対してそういうことを言うべきではない、オレが代って撤回する」。そして、なぜ点検の時に正座をする必要があるのかということを経々と講釈。「独居だけなら見りゃわかるが十二・三

人も一部屋に住んでる雑居じゃあきちんと並んで坐ってもらわなくちゃ確認ができない。顔だって全員覚えてるわけでもないのに、一人は便所へ行ってる、一人は立ってるじゃあ点検もできん。雑居で坐らせるのに独居では坐らせないということはできない。雑居じゃあ大きい小さいのが六名づつ前と後に並ぶんだ。立ってやられたんじゃあ、大きいのがうしろに小さいのがいたりしたら見えなくなったりする。一m九〇cmもあるやつなんか見上げにゃならない。坐ればみんなよく見えるし。全員に同じようにしなくちゃならないのだ。ここじゃあ地獄耳といって誰が教えるわけでもなく、すべて伝わってしまう。一人が立って点検を受けていたら、『じゃあオレも』とみんなが坐らなくなる。そうしたら困るから言ってるんだ。一人だけ優遇するわけにはいかない。ネタミというものがある。とくに男はそういうことでケンカをするから平等にやらせて牽制しなければならぬのだ。云々……」説明の必要もないでしょう。奴らが何をおそれているかはミエミエです。

私は、「思想・良心の自由がある。あんたがたの管理上正座して点検させたいというのはあなたの勝手だが、それに協力する必要はない。あなたがそれによって困ろうと困るまいと、関係はない。私は自分自身で納得のいかない規則にはあくまで従うつもりはない。不服従の自由はある」。奴は「そのとおりだ。じゃあ、どうすれば坐って点検を受けてくれるんだ。夕べ暴力を使っただけは間違っていたと一晩考えた、それで、どうすりゃ坐って点検うけてくれるのか聞きたんだ。頼むから、ここにいる間だけでもそうしてくれ。女区でどうやろうと、オレはそんなことにまで口を出さない。しかし、ここにいる以上、坐って点検をうけてくれないか」。きのうと

はうってかわった懇願調。「あんたが私を洗脳させないかぎり無理だ。私の考えが変わらんうちは絶対に従わない。何をしてもムダです」とつっぱねる。「馬面を呼んで来て謝罪させろ」と要求すると「謝罪させたら坐ってくれるか？」とカケヒキに出てきました。

「それとこれとは全く別問題だ。あんたとはどのようなカケヒキもするつもりはない！」奴はトホウにくれて「べっぴんさんの髪をつかんだり、あんなことして悪かった。オレなんかおまえなんかにくらべりゃ、何もデケエことできんちっぽけな人間かしらん。秋田明大の獄中記を読んだか。あいつは池袋でオレのところに行ったんだ。秋田明大だってちゃんと規則は守っていた。こんな「じじい」の言うことをきいたからって、権力に屈服したというようなことじゃないだろう。……今までそれこそ多くの人が拘置所に入っていたが、みんな誰だって規則はキチンと守っていたではないか。徳田球一だって……」すかしたりなだめたり。「私は私の考えがある。秋何トカとも徳田球一とも考えが違う。あくまで、私は私の意志で行動するのだからいくら言ってもムダです。点検によって私の生活を乱すことを許しません。トイレに坐っている時に点検にきたらトイレに坐ったまま、立っている時に来たら立ったまま点検をうけます。もし、運よく、私がタタミに坐っていれば坐って点検をうけます。坐っていたからといって点検のためにわざわざ立ち上がるということをするつもりはない」。奴「そうか。じゃ、運よく点検のときにここに坐っていることを願うしかないな。坐っていてくれるように願ってるよ。そこに坐っている時に点検にこれるといいがな……」奴は屈服したのです。奴は己れの力の限界をさとしたのです。われわれは主客正常化を「つ克ちとったのです。四・二一」まり子

獄中獄外のすべての仲間へ

東アジア反日武装戦線を救援する会（準）

一七度目の四・一九。

この日、東京拘置所女区から、荒井まり子兵士の拉致を報告する数通の電報、手紙が発信された。そのうちの一通、前林則子さんの葉書はこう伝えている。「至急！ 四月一七日朝、東拘は浴田さんに対して力づくで懲罰を執行しました。その際、東拘は警備隊の男達十数名を女区に入れるという暴力的監視のもとで執行を行なったのです。それに対し荒井さんが追求すると、東拘側は彼女を拉致しました。荒井さんは、今もって行方不明であり、彼女の房は空房となっています。獄中ではハNSTや〃荒井さんを返せ！〃のシユブレヒコールを行ない抗議していますが、ぜひ外の方からも……彼女が存在を確めて下さい。大拘の鈴木国男さんの虐殺は大拘だけの問題ではなく、すべての監獄、獄中の問題であり、密室の監獄で敵はどのような手を用いるかは、警察でデッチ上げられた私達にはよくわかりますし、浴田さんへの殺人的暴力、鈴木君虐殺は明確に敵の正体を物語っています。……」 ◎東拘の暴力支配に抗議する！

◎懲罰粉砕！ ◎自殺房撤廃！ 私達は人間である！

江口良子さんはこう伝えている。「拘置所は、突然『東アジア反日武装戦線』の人達三人の懲罰執行停止を禁止し強制執行としてきました。それに抗議した荒井まり子さんが四月一七日朝、警備隊に強制連行されました。どこへ拉致されていったのか判りませんし、一九日（午前中）現在、まだ戻っていません。点検時を初め、

その他、皆で抗議を続けています。……最近、拘置所は点検の時、私達が抗議↓番号を言い終らないうちにドアを閉めてしまうということをやりました。これは拘置所側の点検拒否という状態です。拘置所側が弾圧強化に出てきましたが、このようなことは五月（春闘）の闘いへ向けての予防弾圧、先制攻撃とも思われますが……。闘いは続行していきます。……」

一人の獄中者に対する攻撃を仲間全体で反撃してゆく陣型が東拘女区で形成されている。この陣型が確固としてある限り、日帝の密室の暴行は直ちに人民の前に明らかにされ、監獄支配の根本は確実にくずれてゆく。東拘女区の陣型を東拘全域に、そして日帝支配下の監獄全域におし拡げよう。

監獄と精神病院は、日帝の支配を根底で支えるむき出しの暴力装置である。この装置に対決する戦い。過去百数十年、戦いぬかれてきた反日獄中獄外戦線の戦いに合流し、あらゆる方法で、監獄・精神病院内暴力に対し反攻しよう。東アジア反日武装戦線を救援する会（準）も獄中者組合の獄中獄外の仲間とともに五月の闘いをひとつの結節点として闘いつづける。（四月二十六日、東アジア反日武装戦線獄中兵士の弁護団は、暴行看守二人を特別公務員暴行陵虐・同致死傷で告発した。）

臨時連絡先

東京都三鷹市深大寺三九〇三

佐々木方

K Q 仮連絡所

WRI - JAPAN

大阪市阿倍野区旭町2-12-2